

リブ付管用
クイックイーター
QE 支管 取扱説明書

アロン化成株式会社


このたびは、「リブ付管用QE支管」をご購入いただきありがとうございます。
施工前にこの取扱説明書をよくお読みいただき安全に施工されるようお願いいたします。
初めて「リブ付管用QE支管」を施工する場合は、メーカーの施工指導を受けてください。


施工上のご注意

ここに示した注意事項は、製品を正しくお使いいただき、「使用上におけるトラブル」「物的損害の発生」を未然に防止するためのものです。

注意 誤った使いかたをすると「傷害または財産への損害が発生する可能性が想定される」内容を説明しています。

■お守りいただきたい内容の種類を、次の絵表示で区分し、説明しています。

 してはいけない「禁止」内容です。

 必ず実行していただく「強制」内容です。

分解・改造をしない。



破損、浸入水の原因になります

初期状態から逆回転しない。



受口がはずれ動かなくなります。
(初期状態のまま、取付けできます。)

ハンドル締付けに工具を使用しない。



過度な力が働くと破損の原因になります。

自在受口は15度以上の
無理曲げ使用しない。



浸入水の原因になります。

自在受口は汚水の滞留部が
生じる施工はしない。



可とう受口のステンレスバンドは
過度に締付けない。



受口がよじれ浸入水の原因になります。

可とう受口には滑剤を使用しない。



抜けて浸入水の原因になります。

可とう受口は角度調整に使用しない。



取付完了後に取り外した製品は
再使用しない。



砂噛みなどで浸入水の原因になります。

支管の管底が本管の中心より
下方にならないようにする。



ツメで流れが阻害される原因になります。

取付管にあったホールソーを用いて
せん孔する。



取付け不可や、浸入水の原因になります。

ハンドル回転後、合いマーク範囲内
であることを確認する。



過度な力が働くと破損の原因になります。

同梱している充填材(セメダイン社製
スーパーシール)を必ず使用する。

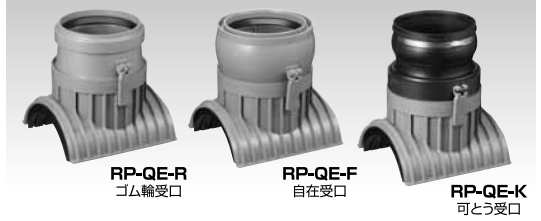


充填材は包装裏側の取扱説明書を
よく読んで使用する。



製品特長

リップ付管用QE支管は、接合剤・番線が不要な回転固定式の支管です。
 ハンドルを一回転させ、シールリングを押圧することで支管接合を行います。
 このため、手間のかかる支管取付け作業を手早く・簡単・確実に行なうことが可能となりました。
 さらには、止水に充填材を併用することで安全な水密性を確保しております。また、取付管受口が3タイプあり、使用形態に合わせて選択ができます。



製品構成(梱包内に含まれるもの)

支管本体



シールリング



充填材
(セメダイン社製)
(スーパーシール)

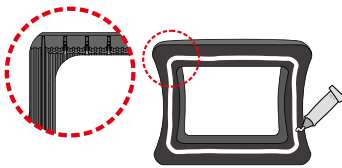

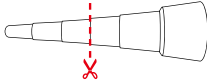
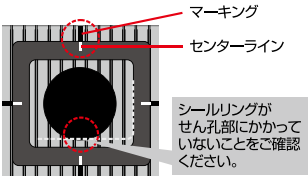

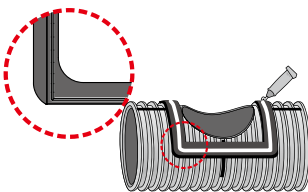

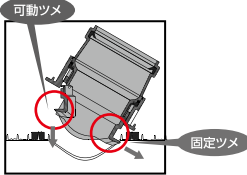
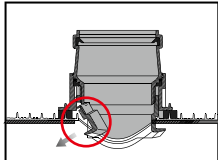


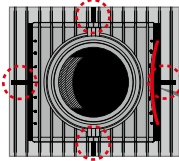


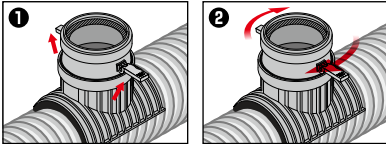
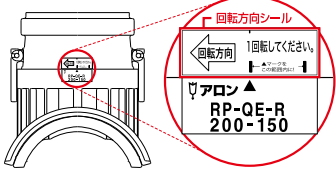
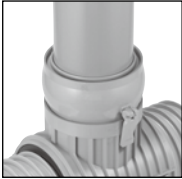
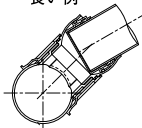
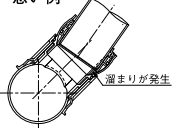
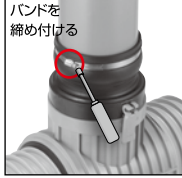
掘削及び埋め戻し時の注意事項

- ・後掘りでせん孔する場合は、管の破損を防止するために、せん孔部分を中心に上下流方向へ各1m区間の土砂を取り除いてから作業を行ってください。
- ・埋戻し時、支管の周囲は十分に締め固めてください。

施工手順

工程		注意事項								
位置決め	<p>シールリングを仮置きして、合いマーク位置部(4箇所)にマジックで印を入れ、下図のように管軸方向と周方向に結びます。</p>	<p>⚠ 支管の管底が本管の中心より下方にならないようにすること。 ツメによって流れを阻害する場合があります。</p> <p>取付け可能範囲</p> <p>支管の管底が本管の中心より下方にならないようにする</p>								
せん孔	<p>取付管径に合ったホールソーを用いて上記の交点をセンターとしてせん孔します。せん孔に伴い生じた内外周のばりは、ヤスリなどで滑らかに仕上げてください。</p> <p>せん孔位置</p> <p>(単位mm)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>取付管径</th> <th>ホールソー外径</th> <th>適用せん孔径</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>100</td> <td>φ120</td> <td>φ117~φ122</td> </tr> <tr> <td>150</td> <td>φ170</td> <td>φ168~φ172</td> </tr> </tbody> </table>		取付管径	ホールソー外径	適用せん孔径	100	φ120	φ117~φ122	150	φ170
取付管径	ホールソー外径	適用せん孔径								
100	φ120	φ117~φ122								
150	φ170	φ168~φ172								
		<p>⚠ シールリングが当たる部分のリップに欠けのないことを確認すること。 欠けている場合は使用できません。</p> <p>⚠ 取付管径に合ったホールソーを用いて適応径にせん孔すること。 せん孔径小:取付けできません。 せん孔径大:浸入水の原因となります。</p> <p>⚠ 芯ズレしないようにせん孔すること。 ズレると支管取付けできない場合があります。</p>								

工程			注意事項
充填材塗布	充填材をシールリングのパイプ当り面のリブに沿って塗布してください。  <p>※充填材は容量の半分を目安に塗布してください。</p>		充填材は充填材包装裏面の取扱説明をよく読んでから使用すること。  <ul style="list-style-type: none"> ・充填材を開封する際は、4つある切れ込みの内の3つをはさみ等でカットして使用してください。 ・充填材はシールリングの両面に塗布しますが、それぞれ容量の半分くらいを目安に使用してください。
シールリング取付け	仮置時にマーキングしたポイントに沿って取付けてください。 		シールリングがせん孔部にあたっていないこと。
充填材塗布	残りの充填材をシールリング上の支管本体の当り面のリブに沿って塗布してください。 		充填材は充填材包装裏面の取扱説明をよく読んでから使用すること。
支管本体取付け	固定ツメをせん孔内へセットします。その際、シールリングの溝に沿っているか確認してください。  <p>可動ツメをセットします。</p> 	 	初期状態から逆回転しないこと。 受口が外れ、動かなくなります。(初期状態のまま、取付けできます。) 支管上のセンターラインと、シールリング上のセンターラインが重なっているか確認すること。  <p>支管上のセンターラインとシールリングのセンターラインを重ねてください。</p> <p>スカートの凹み (= 固定ツメ側)</p>

	工 程	注 意 事 項
支管本体 取付け	<p>ハンドルを起こし、時計回りに回転させてください。</p> <p>1/2回転:軽く揺すって、かたよりが無くセットされていることを確認してください。</p> <p>1回転:マーク範囲内で止めてください。</p>  <p>① ハンドルを起こします。</p> <p>② 矢印方向(時計回り)に1回転させ、ハンドルが管軸と垂直になるまで締め込んでください。</p>	<p>⊘ ハンドル締め付けは工具を使用しないこと。過度な力が働くと破損の原因となります。</p> <p>⚠ シールリングと支管本体のズレがない事を確認すること。その際、シールリングのリップが見える程にズレていると浸入水の原因となります。</p> <p>⚠ 1回転後、マークの範囲内まで回転しているかを確認すること。回転不足だと締め付けが足らず浸入水の原因となります。</p> 
取付管 接続 (ゴム輪受口) (自在受口)	<p>通常のゴム輪接続と同じです。取付管は面取りをして、滑剤を塗布して挿入してください。</p> 	<p>⊘ 自在受口は15度以上の無理曲げが起こらないように余裕をもたせて角度設定すること。無理曲げは浸入水の原因となります。</p> <p>⊘ 自在受口は汚水の滞留部が生じないようにすること。</p> <p>良い例  悪い例  通まりが発生</p>
取付管 接続 (可とう受口)	<p>取付管を差込み、ボックスドライバーなどを使用してステンレスバンドを締め付けてください。締め付けトルクは4~7kN・m程度です。※手締めで十分締まります。</p>  <p>バンドを締め付ける</p>	<p>⊘ 可とう受口はステンレスバンドを過度に締め付けないこと。過度に締め付けると受口がよじれ浸入水の原因となります。</p> <p>⊘ 可とう受口は滑剤を使用しないこと。抜けて浸入水の原因となります。</p> <p>⊘ 可とう受口は施工時に角度調整しないこと。可とう受口は15度の可動域がありますが、施工時の角度調整には使用しないでください。</p>
その他		<p>⊘ 取付完了後に取り外した製品は再使用しないこと。砂かみなどで浸入水の原因となります。</p>